

▶ 社会人のための大学院進学のおすすめ ◀

金沢大学医学部保健学科

真田 茂

現在、放射線技術学において大学院教育を受けようと思えば全国的に門戸は広く開かれています。本稿では会員の皆さんに、退職または休職することなく課程を修めることの可能な大学院への進学について、概略を紹介いたします。

1. 大学院教育とは？

要素技術の進歩や社会環境の変化に伴い、放射線技術学の内容は自ら進化しなければなりません。例えば、最新の放射線医療機器の進歩や疾病構造の多様化などに対応しながら、科学的にも社会的にも最適な保健・医療・福祉を実施しなければなりません。そのためには、放射線技術学を専門とする私たち自身の、時代に即した絶え間ない研究・教育が不可欠です。

さて、学部教育において卒業研究を経て現場に出た場合、研究する能力や後輩を指導する能力は、例えば車の運転でいえば自らが路上教習を受けられる程度だと思います。もし、修士課程(博士前期課程)を修めれば、免許を取ってようやく自分一人で運転できるかな？という程度でしょう。さらに、博士課程(博士後期課程)を修めれば、少しは車の運転方法を人にも教えられるようになったかな？という程度でしょうか。

たとえ大学院教育を受けていなくても、個人の熱意、独学、経験などで一流の研究・教育者として活躍している人たちも多数います。それでは、社会人で経験も豊富、研究もまっすぐ頑張っているという人たちに、今さら大学院教育は必要ないのでしょうか？私は、放射線技術学分野の場合、そのような人たちにこそ大学院教育を勧めたいと考えています。なぜなら、当該社会人にとっては新たに系統的な研究方法が習得できて、さらには修士あるいは博士の学位が得られる大きなチャンスだと考えるからです。また、今まで、放射線技術学の分野には大学院教育と呼べるようなものはありませんでした。ここ数年前からようやくスタートしたのが実情です。すなわち、この社会人大大学院制度は、先達がほとんど独学で礎を構築してきた放射線技術学をさらに発展させる大きな原動力にもなる

考えます。

2. 応募の方法

本項と次項については、金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻(<http://mhs3.mp.kanazawa-u.ac.jp/>)を例に話を進めます。どこの教育機関でも大差はないと思いますが、それぞれが志望する大学院についてインターネットホームページを参照したり、直接問い合わせたりして確認して下さい。

まず、修士課程の社会人特別選抜に出願するための資格は、「医療・保健・福祉施設、教育研究機関、官公庁、企業等において、専門的な実務経験があって、下記のいずれかに該当する人」です。

大学を卒業した人

大学評価・学位授与機構から学士の学位を授与された人および受験年度内に授与される見込みのある人

次の、に該当する人は、あらかじめ資格審査が必要です。

大学に3年以上在学し、所定の単位を優れた成績で修得したものと本研究科が認めた人

大学を卒業した人と同等以上の学力があると本研究科が認めた22歳以上の人(短期大学、高等専門学校、専修学校、各種学校の卒業者を対象として考えています)

外国での教育歴や旧教育課程に関することなど一部省略した部分もありますが、要するに、本学会会員のほとんどは出願できるということです。

修士課程の場合、学士の学位を持つ人は問題なく出願できます。また、学士の学位は持っていないとしても、研究業績などからそれに相当すると資格審査で判断されれば出願できます。同様に博士課程の場合では、修士の学位を持つ人は問題なく出願できますし、資格審査で認定されれば修士の学位を持たなくても出願できます。

ただし、次項にも関連しますが、社会人大大学院生の場合には指導教員の研究指導の時間に限りがあります。

円滑に大学院の課程を進めるためには、大学院に常時通学できない分、当該社会人大学院生自身の研究を推進する能力や適切な研究環境が要求されます。あらかじめそのような打ち合わせも必要ですから、「志願者は指導予定教員と前もって連絡をとること」となっております。ここで、“要求される院生自身の研究を推進する能力”と、前段の“資格審査の認定基準”はほぼ同じであると理解して下さい。修士課程と博士課程との基準は異なりますし、ケース・バイ・ケースの側面もありますから、ここでそれらを明記することは困難です。ただ、本学会や他学会での学会発表や論文発表の経験があれば、まずは相談してみてください。その先の展開を必ずや見いだせるに違いありません。

この指導予定教員と前もって打ち合わせることにについては、決して億劫にならないで下さい。大学院の資料などに記載された連絡先へ直接問い合わせるのもよいですし、自身の出身校の教員や学会での知人などを通して間接的に問い合わせてもよいです。とにかく、目指す教員は皆さんからの連絡を心待ちにしていると考えて下さい。もし、専門分野の違う教員に最初に連絡したとしても、皆さんが希望する分野の教員をさらに紹介してくれるはずですよ。なお、大学院入試の時期は前年の9月頃からはじめられます。すなわち、来年4月入学のための試験は今年9月頃に行われますから、早めの準備が必要です。

3. 課程の進め方

まず、当該大学院から遠隔地の人でも、修士課程、博士課程のいずれについてもほとんど問題なく履修が可能です。現在、金沢大学では北は北海道、南は九州の社会人大学院生の方々が在籍し、既に修士課程を修了した人も多数います。講義科目については、週末の集中講義やレポート課題の学習などによって履修できます。それよりも何よりも、社会人大学院生にとって最も重要なことは、それぞれの勤務先で継続的に研究を推進することです。大学院に毎日のように通える人を除いて、ほとんどの社会人大学院生にとっては忙しい仕事と並行しながらも自身で研究を着実に進めて、頻りに指導教官と研究打ち合わせをするかどうか、首尾よく修了できるかどうかの成否を分けます。

大学院を修了するための研究成果に関する極めて短絡的な目安について、私見として誤解を恐れずに挙げると次のようになります。これはあくまでも大体の目安であって、規則などで定められた基準ではありません。例えば、修士課程(原則2年間)の場合は2年目に本学会誌に原著論文1編を発表し、その研究成果の詳

細をまとめた50ページ程度の修士論文を作成します。博士課程(原則3年間)の場合は、1年目と2年目に本学会誌に原著論文をそれぞれ1編発表し、3年目には本学会誌あるいは欧米学術誌に英語で原著論文を1編発表します。これら3編の論文は、それぞれが関連し一連のストーリーを構築できるものとします。金沢大学では、邦文学術誌としては本学会誌を最重視していますから上記のように記しました。もちろん、放射線技術学に関するさらに評価の高い学術誌であればなお良いです。

重ねて強調したいのは、これは“これだけやれば修士や博士の学位が取れる”という目安ではありません。あくまでも、“このようなペースで研究を進めて論文が書ければ、恐らく修士や博士の学位に相当するような研究成果が得られているだろう!”という程度です。研究内容が最も重要であって、量的にこれより少なくても審査にパスする場合もあれば、多くてもパスしない場合ももちろんあると思います。

4. まとめ

本稿を目にした多くの会員が、まずはいろんな教育機関へ社会人特別選抜の大学院入試に関する資料を請求されることを期待します。

特に本会の構成員の大半を占める医療現場の診療放射線技師が、それぞれの現場での研究テーマとデータを引っ提げて、放射線技術学の研究・教育現場に乗り込んでいくことを奨励します。なぜなら、大学院の課程を通してその身近な研究テーマを、より科学的に探求する方法を習得できるからです。また多くの放射線技術学の研究・教育現場は、自らが輩出している診療放射線技師の直面するような問題に挑む臨床研究を、さらに行う必要があると考えるからです。

放射線技術学を“より科学的に、さらに臨床的に!”と発展させるために、向学心に燃える会員の皆さんに、重ねて大学院への進学を勧めます(本誌58巻7号巻頭言参照)。もちろん、保健学系の大学院にかかわらず、他の分野にも目を向けて下さい。私は工学系や理学系の大学院に在籍する診療放射線技師を多数知っています(修了した人も)。会員の皆さんのこのような努力が、放射線技術学のすそ野を広げ、学問レベルを高めることに大きく貢献するものと私は確信しています。

E-mail : sanada@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

URL : www.sanadalab.com